



対象別拒否に対する感受性尺度の作成

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2015-04-06 キーワード: 作成者: 戸田, 弘二, 名知, 葵, 能登, 祐加, 津田, 彩子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00006292

対象別拒否に対する感受性尺度の作成¹

戸田 弘二・名知 葵・能登 祐加・津田 彩子

北海道教育大学札幌校社会心理学研究室

Construction of Rejection Sensitivity Questionnaire by Objects

TODA Koji, NACHI Aoi, NOTO Yuka and TUDA Ayako

Department of Social Psychology, Sapporo Campus, Hokkaido University of Education

概 要

本研究では、日本の大学生がどのような場面で拒否される恐れを感じているのかを調査することで、重要な他者（恋人、友人、家族、先生）それぞれとの拒否に対する感受性を独立に測定できる尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とした。ブレンストーミング（大学生11名）と予備調査（大学生79名）を通して尺度項目の選定を行い、本調査では、大学生149名（男性50名、女性99名）を対象に質問紙調査を行った。その結果、対象別にはやや信頼性の低い尺度もあったが、尺度全体としては信頼性、基準関連妥当性ともに高い尺度が構成された。また、愛着スタイルとはアンビバレント得点と、友人関係スタイルとは傷つけ回避得点、傷つけられ回避得点、距離獲得得点と正の相関が見られた。さらに、恋愛経験は恋人への、いじめられ経験は友人への拒否感受性得点とのみ関連しており、過去の対人関係が現在の対人関係での拒否感受性に関係特異的に関わることを示唆された。

Key Words：拒否に対する感受性、重要な他者、愛着スタイル、友人関係スタイル

日常生活では、他者からの拒絶を体験する場面がある。例えば、相手から無視をされたり、自分の申し出が断られたり、グループから仲間はずれにされたりする状況のことである。このような状況を“対人的拒絶（interpersonal rejection）”という（岡田・中山，2008）が、親密な他者からの

拒絶をどの程度予期し、不安に感じるかということには個人差がある。例えば、仲間に加えてもらいたいと思っても、断られるのが怖くて言い出せない人もいれば、全く気にしない人もいる。このような個人差を拒否に対する感受性（rejection sensitivity）という。拒否に対する感

1 本論文は平成24年度心理学応用実験ⅡEで第1著者の指導のもとに行った研究成果を、第1著者が分析・執筆し直したものである。

受性は、重要な他者からの拒否を不安とともに予期し、敏感に知覚し、強く反応する傾向として定義されている (Downey & Feldman, 1996)。

Downey & Feldman (1996) は、拒否される恐れのある18の状況を設定し、それぞれの状況での結果に対する不安や心配の程度 (拒否に対しておく価値) と、相手が受け入れてくれるかどうかの見込み (拒否に関わる期待) の2側面から測定する“拒否に対する感受性尺度”を開発した。彼女らは Bowlby の愛着理論にもとづき、幼少期に親から拒否された体験が拒否に対する感受性を育て、やがて重要な他者に受容やサポートを求めようとする時に、拒否されるのではないかという予期をもたらす。この不安を伴った予期が他者の曖昧な反応を拒否と知覚させ、相手に対する怒りや嫉妬、相手の行動をコントロールしようとするなどの感情的、行動的な過剰反応をもたらすことになるという。

本邦でも、本多・桜井 (2000) が Downey & Feldman (1996) の拒否に対する感受性尺度に修正を加えて日本語版の尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討している。彼女らは尺度の構成概念妥当性を検討するために愛着スタイル尺度、公的自意識尺度及び孤独感尺度との相関を検討した。その結果、愛着スタイルの安定性とは負の、アンビバレント性及び回避性とは正の、公的自意識尺度とは正の、孤独感尺度の対自的次元では正の、対他次元では負の相関という予想通りの結果を得た。また、Cronbach の α 係数も .79 と十分な内的一貫性が確認された。このように、本多・桜井 (2000) の尺度は Downey & Feldman (1996) と同程度の信頼性と妥当性が確認されたものの、いくつかの問題点が残っている。例えば、彼女らは日本語版を作成するにあたって、日本の文化を考慮した修正を加えたとしているものの、なおも、「よく知らない人をデートに誘う」や「恋人にあなたと一緒に引っ越してもらえるかどうか尋ねる」など、日本の大学生には想像しにくい状況が含まれている。また、彼女らの尺度は、親に対する状況が2項目、友人に対する状況が6項目、恋

人に対する状況4項目、先生に対する状況が1項目、よく知らない人 (あるいは、さほど親しくない友人) に対する状況が3項目と対象間での項目数にばらつきがある。拒否に対する感受性は対象となる相手との関係に依存する可能性が高いが、彼女らの尺度では対象別の検討を行うことができないという問題がある。

そこで、本研究では、まず日本の大学生が実際にどのような場面で拒否される恐れを感じているのかを調査する。次いで、その結果に基づいて重要な他者 (恋人、友人、家族、先生の4対象) それぞれとの拒否に対する感受性を独立に測定できる尺度を作成し、尺度の信頼性と妥当性を検討することを目的とした。

まず、基準関連妥当性を検討するために、浅野 (2010) の拒絶感受性尺度との関連を検討する。この尺度は本研究で作成しようとする尺度と同様に他者からの拒否を恐れ、拒否に対して過剰に反応する傾向である拒絶感受性 (浅野は rejection を拒絶と訳している) を測定するために作成された尺度である。しかし、Downey & Feldman (1996) の尺度とは異なり、特定の対象を想定しないで拒絶感受性の個人差を測定する。本研究で作成する尺度とは正の相関が予想される。

次に、構成概念妥当性を検討するために、愛着スタイルとの関連を検討する。成人版愛着スタイル尺度は、Hazan & Shaver (1987) による尺度を参考に、戸田 (1988/2001) が開発した尺度である。乳幼児期の愛着パターンに対応した成人の3つの愛着スタイルを測定するための下位尺度から構成されている。このうち、安定性は人と親しくなりやすく、頼られたり、頼ったりすることを心地良いと感じる傾向である。アンビバレント性は過度の親和性と関係不安をもつものとされており、他者からの受容や拒否に影響を受けやすい傾向である。回避性は人と親しくなることを回避し、完全に人を信頼することはできないとする傾向である。先行研究 (Downey & Feldman, 1996; 本多・桜井, 2000) より、安定性とは負の、アンビバレント性ならびに回避性とは正の相関を持つも

のと予想される。

ところで、本多・桜井（2000）は、Downey & Feldman（1996）が過去の家庭内暴力にさらされた経験と拒否に対する感受性との関連性を指摘したことを受けて、今後は家庭での経験だけではなく、学校などでのいじめの経験や友人関係などとの関連性を検討する必要があることを指摘している。

そこで、いじめられた経験の有無によって拒否に対する感受性が異なるかどうかを検討する。過去にいじめを受けたことがあると、拒否に対して敏感になるため、いじめられた経験がある場合の方がいない場合よりも拒否に対する感受性が高いことが予想される。

最後に、友人関係スタイルとの関連について検討する。岡田（2012）によると、現代の青年は、友人の意義や友人からの評価が大きな意味を持つ一方で、それゆえにその評価によって自己が傷つきダメージを受けないよう、距離を持った関わり方をするという。そして、岡田（2012）は、青年期の友人関係スタイルの中でも、友人から傷つけられることを回避する傾向及び友人を傷つけることを回避する傾向に特化した尺度である傷つけ合い回避尺度を作成した。この尺度は4つの下位尺度から構成されており、“傷つけられ回避”は相手から傷つけられたり恥をかくことを避けようとする関わり方のことをいう。“距離確保”はお互いの内面に立ち入らず距離を取った関わりを、“礼儀”は礼儀を守り共感的配慮によって相手を気遣う関わり、“傷つけ回避”は相手を感情的に傷つけたり気分を害したりする不安から防衛的に行動を抑制する関わりをいう。友人関係スタイルと拒否に対する感受性との関連を調べた研究はこれまで報告されていないが、岡田（2011；2012）では、傷つけ回避は他者から無視されたり疎まれているという被拒絶感を弱めるが、傷つけられ回避は被拒絶感を高めていることが報告されている。被拒絶感は拒否に対する感受性とは異なる概念であるが、拒否に対する感受性の高い人は、より一層他者に拒絶されることを避けようとするため、友人

関係では相手を傷つけないように努力するとともに傷つけられないよう用心するものと予想される。

予備調査

目的

予備調査に先立ち、大学生を対象に「親しい人に何かを頼む時に拒否されるのではないかと断られるのではないかと不安になる場面」をブレインストーミングによって検討した（大学生11名を対象に2回に分けて行った）。これに、本多・桜井（2000）の場面を加えて整理した結果、恋人が25場面、友人が18場面、家族が11場面、先生が13場面となった。

そこで、予備調査では、これらの項目に対する大学生の反応を分析し、本調査で用いる質問項目を選定することを目的とする。

方法

被調査者 北海道教育大学札幌校の大学生計79名であった。対象者の負担を考慮して調査を調査A（友人と先生に対する拒否感受性）と調査B（恋人と家族に対する拒否感受性）の2つに分けて実施した。調査Aの性別の内訳は男性20人、女性21人、不明1人、平均年齢は21.5歳、標準偏差は1.64であった。調査Bの性別の内訳は男性11人、女性26人、平均年齢は20.7歳、標準偏差は0.94であった。

質問紙の構成 調査A：①友人および先生に対する拒否感受性項目：予備調査で作成された31項目（友人18項目、先生13項目）を用いた。それぞれの場面において、(a)各場面で受容あるいは拒否されるという結果をどれくらい心配に思うか、(b)相手からの受容あるいは拒否される可能性がどの程度あると思うか、の2つの観点からの評定を求めた。具体的には、(a)に対しては、“非常に心配である（6点）”から“全く心配でない（1点）”までの6段階評定に“想像できない（0点）”を加えた7件法で、(b)に対しては“必ず断られる（6点）”から“必ず受け入れてくれる（1点）”までの6段階評定に“想像できない（0点）”を加え

た7件法での回答を求めた。②拒絶感受性尺度：浅野（2010）の作成した14項目からなる尺度を用いた。この尺度は、相手から拒否されることについてどの程度不安、あるいは心配に思うかについて測定するためのものである（例えば、「自分の意見や気持ちを正直に伝えると相手に否定されそうで怖い」「相手の意見や行動にあわせないと嫌われるのではないかと心配になる」など）。評定は“あてはまる（5点）”から“あてはまらない（1点）”までの5件法での回答を求めた。③基本的属性・その他の項目：最後に被調査者の性別、年齢、質問紙に対する自由記述欄を設けた。

調査B：④恋人および家族に対する拒絶感受性項目：予備調査で作成された36項目（恋人25項目、家族11項目）を用いた。調査Aと同様に、(a)各場面で受容あるいは拒否されるという結果をどれくらい心配に思うか、(b)相手からの受容あるいは拒否される可能性がどの程度あると思うか、の2つの観点からの評定を求めた。評定方法は調査Aと同様である。なお、調査Bでも②拒絶感受性尺度と③基本的属性・その他の項目を含めた。

倫理的配慮と手続き 2012年12月に、心理学の講義時間を利用して無記名式の質問紙を配布し、後日回収した。その際に、回答は統計的に処理されるため個人が特定されることはないことや、回答は任意であり回答しなくても不利益が生じないことを口頭及び紙面にて説明した。

結果と考察

本調査で用いる質問項目を選定するために、以下の分析を行った。まず、恋人、友人、家族、先生の4対象、それぞれの項目について、拒否されることへの不安評価（以下、本多・桜井（2000）に順じて価値得点と呼ぶ）と拒否される可能性評価（以下、同様に期待得点と呼ぶ）及び、両評価での想像できないと回答した比率を求めた。次いで、想像できないという回答は欠損値としたうえで、価値得点×期待得点の積を算出し、これを拒絶感受性得点とした。さらに、浅野（2010）の拒絶感受性尺度（調査Aは $\alpha=.75$ 、調査Bは $\alpha=.91$ ）の合計得点を算出し、拒絶感受性得点との相関を

求めた。ただし、浅野の尺度項目14（相手に自分の意見や気持ちを正直に伝えることができる）は信頼性を下げていたため削除し、13項目の合計点を用いた。付録の付表A～Dは4対象についての不安評価と可能性評価での想像できないと回答した比率、及び拒絶感受性得点の平均値と標準偏差、拒絶感受性尺度との相関係数を示している。これらの指標に基づいて本調査で用いる質問項目を選定した。

質問項目の選定基準は、不安評価及び可能性評価で想像できないと回答した比率が小さいこと、拒絶感受性得点の平均値が高く、標準偏差が大きいこと、拒絶感受性尺度と正の相関を示していること、とした。これらの基準をできるだけ満たす項目を4対象それぞれについて7項目選択した。以下の、項目の後の（ ）内の数値は、それぞれ不安評価、可能性評価で想像できないと回答した比率、拒絶感受性得点の平均値、標準偏差、拒絶感受性得点との相関係数を表している。

恋人との状況では、「恋人に、あなたの親と会ってくれるように頼む。」(2.9%, 8.6%, 13.47, 8.18, .37), 「恋人に、今日泊まりに行ってもいいかと聞く。」(8.6%, 11.8%, 12.07, 7.26, .35), 「恋人に、手を繋いでほしいと言う。」(2.9%, 5.7%, 7.85, 7.30, .34), 「恋人に、プレゼントをねだる。」(8.8%, 15.2%, 16.77, 8.20, .34), 「恋人に今日、何をしていたかを聞く。」(2.9%, 0.0%, 8.76, 7.05, .35), 「恋人に、もう帰りたいという意思を伝える。」(8.8%, 9.1%, 9.90, 6.95, .47), 「恋人と言い争いをした後で、電話やメールで会いたいと言う。」(11.4%, 17.1%, 14.68, 6.77, .47) を選択した。

友人との状況では、「友人に、500円以上のお金を貸してくれるように頼む。」(0.0%, 0.0%, 8.51, 5.88, .20), 「友人に、完成したレポートや課題を見せてくれないかと頼む。」(0.0%, 7.1%, 11.36, 6.61, .21), 「友人の家に泊めてくれないかと頼む。」(4.9%, 7.1%, 9.32, 6.49, .20), 「友人に、アルバイトを代わってくれないかと頼む。」(4.9%, 9.5%, 15.87, 7.78, .30), 「友人に、

あなたを車で送ってくれるように頼む。」(0.0%, 0.0%, 10.76, 5.93, .22), 「友人に, 約束をキャンセルしたいと告げる。」(2.4%, 4.8%, 11.44, 5.91, .11), 「友人同士の遊びの約束に, あなたも参加してもいいかどうかをたずねる。」(0.0%, 2.4%, 11.35, 5.32, .28) を選択した。

家族との状況では, 「家族に, あなたの送り迎えをしてくれるように頼む。」(0.0%, 0.0%, 8.69, 8.27, .36), 「きょうだいがある時に, あなたの友人を家に呼んでもいいかと尋ねる。」

(2.8%, 2.8%, 10.43, 8.96, .10), 「家族の物をゆずってくれないかと尋ねる。」(8.3%, 8.3%, 11.21, 7.80, .18), 「親に, 臨時のおこづかいをくれるように頼む。」(8.3%, 8.3%, 15.00, 9.81, .21), 「親に, 欲しい物を買ってほしいとねだる。」

(5.7%, 5.6%, 15.94, 9.55, .27), 「親に, 生活費をもっと増やしてくれるように頼む。」

(27.8%, 25.0%, 18.62, 9.46, .29), 「親の意に反した進路の希望を伝える。」(2.8%, 5.6%, 14.88, 10.55, .19) を選択した。このうち, 「親に, 生活費をもっと増やしてくれるように頼む」

は想像できない比率 (27.8%と25.0%) が高かったが, これは「生活費」という言葉が自宅から通っている学生には不適切であったためと考えられる。そこで, 本調査ではこの項目を「親におこづかい (生活費を含む) を増やしてくれるように頼む」に変更することとして, この項目を選択した。

先生との状況では, 「先生を飲み会に誘う。」(7.3%, 9.5%, 10.78, 6.94, .35), 「先生に, 授業を時間通りに終わらせてくれるように頼む。」

(0.0%, 7.3%, 13.32, 6.23, .30), 「先生に, ゼミの日程を変更してくれるように頼む。」

(2.4%, 9.5%, 13.49, 7.99, .20), 「先生に, 課題の提出期限を延ばしてくれるように頼む。」

(0.0%, 12.2%, 19.47, 8.14, .17), 「先生に, 欠席した事情を考慮して欲しいと頼む。」(2.4%, 9.5%, 15.35, 7.70, .36), 「先生に, 授業の単位を出してくれるように頼む。」(4.9%, 16.7%, 20.54, 6.78, .15), 「先生に, テストの追試験をしてくれるように頼む。」(4.9%, 9.5%, 17.89,

6.17, .32) を選択した。

次に, 各対象別に7項目の信頼性分析を行った (Table1参照)。その結果, 恋人.73, 友人.81, 家族.84, 先生.81と恋人が他の対象と比べると相対的に低めであったが, いずれもほぼ満足のいく値であった。そこで, 対象別に7項目の合計得点を算出し, それぞれを恋人に対する拒否感受性得点 (以下, 恋人拒否感受性得点), 友人に対する拒否感受性得点 (友人拒否感受性得点), 家族に対する拒否感受性得点 (家族拒否感受性得点), 先生に対する拒否感受性得点 (先生拒否感受性得点) とした。いずれも得点が高いほどその対象に対する拒否感受性が高いことを意味する。平均値を見ると恋人が76.3, 友人が78.9, 家族が101.6, 先生が110.5と普段親密な交流が行われている関係ほど拒否に対する感受性が低くなっているように思われた。なお, 拒絶感受性得点との相関は $r=.30\sim.43$ と, いずれも中程度の正の相関が認められた。

以上より, 4対象×7項目の計28項目を本調査用の質問項目とした。

Table1 対象別拒否感受性尺度の基礎統計量と拒絶感受性尺度との相関

拒否感受性 尺度	α	平均値	標準 偏差	相関 係数	N
恋人	.73	76.3	27.7	.43	15
友人	.81	78.9	30.6	.34	35
家族	.84	101.6	49.1	.31	23
先生	.81	110.5	32.0	.30	28

本調査

目的

恋人, 友人, 家族, 先生の4対象別の拒否に対する感受性尺度を作成し, その信頼性と妥当性を検討することを目的とする。

方法

被調査者 北海道教育大学札幌校の大学生計149名から回答を得た。性別の内訳は男性50人, 女性99人, 平均年齢は20.9歳, 標準偏差は2.45で

あった。

質問紙の構成 ①対象別拒否に対する感受性尺度：予備調査で作成された28項目（恋人・友人・家族・先生の4対象×7項目）からなる尺度を用いた。それぞれの場面において、(a)各場面で受容あるいは拒否されるという結果をどれくらい心配に思うか、(b)相手からの受容あるいは拒否される可能性がどの程度あると思うか、の2つの観点からの評定を求めた。具体的には、(a)に対しては、“非常に心配である（6点）”から“全く心配でない（1点）”までの6件法での、(b)に対しては“必ず断られる（6点）”から“必ず受け入れてくれる（1点）”までの6件法での回答を求めた。②拒絶感受性尺度：予備調査と同様に浅野（2010）の拒絶感受性尺度を用いた。ただし、予備調査から、項目14（相手に自分の意見や気持ちを正直に伝えることができる）は信頼性を下げていることがわかっていたので、これを削除し、13項目を用いた。評定は“あてはまる（5点）”から“あてはまらない（1点）”までの5件法での回答を求めた。③愛着スタイル尺度：戸田（1988/2001）が作成した18項目からなる尺度を用いた。この尺度は、成人の3つの愛着スタイルを測定するためのものである。評定は“非常によくあてはまる（6点）”から“全くあてはまらない（1点）”までの6件法での回答を求めた。④傷つけ合い回避尺度：岡田（2012）が作成した20項目からなる尺度を用いた。この尺度は、青年期の友人関係について、傷つけ合うことを回避したり、距離を保とうとしたりする傾向を測るためのものである。原版は、傷つけられ回避9項目、距離確保8項目、礼儀10項目、傷つけ回避9項目の、計36項目からなるが、被調査者の負担を考慮し、4つの下位尺度から各5項目、計20項目を選択した。評定は“とてもあてはまる（5点）”から“全くあてはまらない（1点）”までの5件法での回答を求めた。⑤基本的属性・その他の項目：被調査者の性別、年齢、質問紙に対する自由記述欄を設けた。さらに本調査では、恋愛経験（恋人の有無：いる・現在はいないが過去にいたことがある・一度もいた

ことはない、の3項目から選択）、過去のいじめられ経験の有無（ある・ない）とその辛さ（“非常につらかった（7点）”から“全くつらくない（1点）”の7件法）について問う項目も設けた。

倫理的配慮と手続き 2013年1月から2月にかけて、無記名式の留置調査を行った。その際に、回答は統計的に処理されるため個人が特定されることはないことや、回答は任意であり回答しなくても不利益が生じないことを口頭及び紙面にて説明した。

結果と考察

拒否に対する感受性尺度の構成 拒否に対する感受性尺度は、2種類の評定からなっている。最初の評定では、相手から受容あるいは拒否されるという結果をどれくらい心配に思うか（価値得点）を測定し、次の評定では、相手からの受容あるいは拒否される可能性がどの程度あると思うか（期待得点）を測定している。そして、価値得点と期待得点の積を拒否感受性得点として、拒否に対する感受性の強さを表す指標とした。

各項目の拒否感受性得点の平均値と標準偏差はTable2に示した通りである。項目4、項目11の2つの項目は、フロア効果が生じたものと判断し、その後の分析からは除外した。

まず、26項目に対して、共通性の初期値を1に設定して主成分分析を行ったところ、固有値1.0以上で8因子が抽出されたが、固有値の変化は6.89, 2.07, 1.82, 1.34…と第1因子と後続因子との間に大きな差がみられたため、スクリー法に基づいて1因子解が適当と判断した。第1因子の寄与率は26.5%であった。第1因子への因子負荷量はTable2に示す通りである。26項目中25項目が.30以上で負荷していた。「先生を飲み会に誘う」だけが.26と低い負荷量を示していたので、これを削除し、残りの25項目を最終的な尺度項目とした。価値得点、期待得点の因子負荷量及び平均値、標準偏差はTable3に示す通りである。

25項目について、Chronbachの α 係数を算出したところ.88であった。これらは本多・桜井（2000）の.79やDowney & Feldman（1996）の

Table2 拒否に対する感受性尺度の因子分析結果と基礎統計量

No.	項目内容	因子負荷量	M	SD	I-T 相関
14.	恋人に、プレゼントをねだる。	.65	13.0	6.7	.60
22.	恋人に、もう帰りたいという意思を伝える。	.58	9.5	5.5	.52
26.	恋人と言い争いをした後で、電話やメールで会いたいと言う。	.55	13.3	6.5	.48
8.	恋人に、今日泊まりにいてもいいか、もしくは泊まりに来てくれないかとたずねる。	.54	9.9	6.0	.47
17.	恋人に今日、何をしてたかを聞く。	.35	5.6	4.2	.29
1.	恋人に、あなたの親と会ってくれるように頼む。	.30	9.6	6.2	.25
11.	恋人に、手を繋いでほしいと頼む。	—	6.7	5.7	—
20.	友人に、約束をキャンセルしたいと告げる。	.64	11.6	5.1	.57
7.	友人の家に泊めてくれないかと頼む。	.60	9.7	5.6	.54
25.	友人同士の遊びの約束に、あなたも参加してもいいかどうかをたずねる。	.59	12.0	5.7	.54
12.	友人に、アルバイトを代わってくれないかと頼む。	.56	14.8	6.7	.50
9.	友人に、あなたを車で送ってくれるように頼む。	.46	10.6	4.7	.40
5.	友人に、完成したレポートや課題を見せてくれないかと頼む。	.45	11.5	5.5	.39
2.	友人に、500円以上のお金を貸してくれるように頼む。	.39	8.7	5.5	.32
23.	親に、臨時のおこづかいをくれるように頼む。	.54	14.1	8.3	.48
15.	親に、おこづかい（生活費を含む）をもっと増やしてくれるように頼む。	.52	16.8	8.4	.46
27.	親に、欲しい物を買ってほしいとねだる。	.48	14.5	8.3	.43
10.	きょうだい（または、親）が家にいる時に、あなたの友人を家に呼んでもいいかとたずねる。	.46	8.0	6.8	.40
21.	親の意に反した進路の希望を伝える。	.46	12.5	7.6	.39
16.	家族の物をゆずってくれないかとたずねる。	.38	10.6	7.1	.33
4.	家族に、あなたの送り迎えをしてくれるように頼む。	—	6.4	6.2	—
18.	先生に、課題の提出期限を延ばしてくれるように頼む。	.64	19.6	7.6	.58
24.	先生に、欠席した事情を考慮して欲しいと頼む。	.61	13.0	6.5	.56
28.	先生に、テストの追試験をしてくれるように頼む。	.60	18.2	7.4	.53
19.	先生に、授業の単位を出してくれるように頼む。	.57	22.3	8.6	.50
6.	先生に、授業を時間通りに終わらせてくれるように頼む。	.48	14.9	8.3	.42
13.	先生に、ゼミの日程を変更してくれるように頼む。	.48	15.8	8.2	.42
3.	先生を飲み会に誘う。	.26	8.1	5.3	.22

.84よりも高く、十分な内的一貫性が確認されたといえる。

対象別尺度の信頼性の検討 恋人6項目、友人7項目、家族6項目、先生6項目について、Chronbachの α 係数を算出したところ、恋人.66、友人.71、家族.70、先生.81であった。恋人が若干低かったものの、他の対象では十分な内的一貫性が確認されたといえる。

以上より、25項目への回答の平均値を拒否感受性得点（全体）、各対象への回答の平均値を対象

別拒否感受性得点とした。

拒否感受性得点（全体）、及び対象別拒否感受性得点の平均値と標準偏差はTable4に示す通りである。尺度間相関はいずれも比較的強い正の相関を示していた（ $r=.38\sim.60, p<.001$ ）。また、各対象への拒否に対する感受性を比較するために、対象を要因とした対応がある一元配置分散分析を行った結果、対象の主効果は0.1%水準で有意であった（ $F(3, 351)=110.36, p<.001$ ）。そこで、Bonferroniの多重比較を行ったところ、全ての

Table3 拒否に対する感受性尺度の不安得点・期待得点の因子負荷量及び平均値と標準偏差

No.	項目内容	因子負荷量		価値得点		期待得点	
		価値得点	期待得点	M	SD	M	SD
14.	恋人に、プレゼントをねだる。	.71	.57	4.1	1.3	3.1	0.9
22.	恋人に、もう帰りたいという意思を伝える。	.62	.58	3.5	1.5	2.6	0.9
26.	恋人と言い争いをした後で、電話やメールで会いたいと言う。	.65	.63	4.2	1.3	3.1	1.0
8.	恋人に、今日泊まりにいてもいいか、もしくは泊まりに来てくれないかとたずねる。	.60	.55	3.3	1.4	2.8	0.9
17.	恋人に今日、何をしていたかを聞く。	.39	.50	2.4	1.2	2.2	0.9
1.	恋人に、あなたの親と会ってくれるように頼む。	.41	.36	3.2	1.5	2.7	0.9
11.	恋人に、手を繋いでほしいと頼む。	—	—	2.7	1.4	2.2	1.0
20.	友人に、約束をキャンセルしたいと告げる。	.66	.50	4.2	1.4	2.7	0.7
7.	友人の家に泊めてくれないかと頼む。	.63	.58	3.3	1.4	2.8	0.9
25.	友人同士の遊びの約束に、あなたも参加してもいいかどうかをたずねる。	.76	.56	4.1	1.4	2.8	0.8
12.	友人に、アルバイトを代わってくれないかと頼む。	.64	.49	4.2	1.2	3.3	0.9
9.	友人に、あなたを車で送ってくれるように頼む。	.61	.49	3.6	1.2	2.8	0.7
5.	友人に、完成したレポートや課題を見せてくれないかと頼む。	.54	.43	3.8	1.3	2.9	0.7
2.	友人に、500円以上のお金を貸してくれるように頼む。	.40	.57	3.1	1.4	2.6	0.8
23.	親に、臨時のおこづかいをくれるように頼む。	.57	.56	4.0	1.4	3.4	1.2
15.	親に、おこづかい（生活費を含む）をもっと増やしてくれるように頼む。	.56	.48	4.3	1.4	3.8	1.2
27.	親に、欲しい物を買ってほしいとねだる。	.55	.49	3.8	1.4	3.7	1.1
10.	きょうだい（または、親）が家にいる時に、あなたの友人を家に呼んでもいいかとたずねる。	.50	.54	2.8	1.4	2.5	1.3
21.	親の意に反した進路の希望を伝える。	.54	.43	4.0	1.6	2.9	1.1
16.	家族の物をゆずってくれないかとたずねる。	.49	.60	3.1	1.4	3.2	1.1
4.	家族に、あなたの送り迎えをしてくれるように頼む。	—	—	2.4	1.4	2.3	1.1
18.	先生に、課題の提出期限を延ばしてくれるように頼む。	.64	.38	4.7	1.0	4.1	0.9
24.	先生に、欠席した事情を考慮して欲しいと頼む。	.69	.57	3.9	1.3	3.2	0.9
28.	先生に、テストの追試験をしてくれるように頼む。	.65	.48	4.6	1.2	3.9	1.0
19.	先生に、授業の単位を出してくれるように頼む。	.55	.44	4.9	1.2	4.4	1.0
6.	先生に、授業を時間通りに終わらせてくれるように頼む。	.54	.38	4.0	1.4	3.5	1.1
13.	先生に、ゼミの日程を変更してくれるように頼む。	.47	.28	4.2	1.3	3.6	1.0
3.	先生を飲み会に誘う。	.31	.22	3.6	1.5	3.2	1.0

Table4 対象別拒否感受性得点の基本統計量と尺度間相関

尺度得点	α	M	SD	F 値	尺度間相関係数		
					恋人	友人	家族
恋人拒否感受性得点	.66	10.1 ^a	3.6	110.36 ^{***}			
友人拒否感受性得点	.71	11.2 ^b	3.3		.60 ^{***}		
家族拒否感受性得点	.70	12.9 ^c	4.9		.50 ^{***}	.49 ^{***}	
先生拒否感受性得点	.81	17.1 ^d	5.5		.40 ^{***}	.58 ^{***}	.38 ^{***}
拒否感受性得点（全体）	.88	12.9	3.4				

***p<.001 (注)異なるアルファベットの間に5%水準での有意差がある。

対象間で有意差がみられた。すなわち、拒否に対する感受性の平均値は先生>家族>友人>恋人の順に高かった。本田・桜井（2000）では恋人に対する拒否感受性が最も高いという本研究とは逆の結果が得られている。本研究では、日本の大学生が普段の生活の中で拒否されるのではないかと不安になる場面を調査し、これを質問項目としているため、本田・桜井（2000）とは多くの点で項目内容が異なっている。本研究の結果が対象による違いなのか、項目内容による違いなのかについては明らかではないが、親密な交流が行われている対象ほど拒否に対する感受性が低いというのはいささかそうなることといえる。

妥当性の検討 まず、本尺度の基準関連妥当性を検討するために、浅野（2010）の拒絶感受性尺度への回答の平均値を算出し、拒否感受性得点との相関を検討した。その結果、Table5に見られるように、拒否感受性得点（全体）とは $r=.46$, ($p<.001$)、恋人に対する拒否感受性得点とは $r=.34$, ($p<.001$)、友人に対する拒否感受性得点とは $r=.42$, ($p<.001$)、家族に対する拒否感受性得点とは $r=.32$, ($p<.001$)、先生に対する拒否感受性得点とは $r=.38$, ($p<.001$) と、全体得点及び全ての対象に対する拒否感受性得点との間で0.1%水準での有意な正の相関が見られた。以上より、本尺度の基準関連妥当性（併存的妥当性）が確認されたといえる（Table5上段参照）。

次いで、構成概念妥当性を検討するために、愛着スタイル尺度との相関を検討した（Table5中段参照）。その結果、アンビバレント得点は拒否感受性の全体得点及び全ての対象別拒否感受性得点と0.1%水準での有意な正の相関を示していた（ $r=.25\sim.38$, $p<.001$ ）。一方、安定性得点は友人に対する拒否感受性得点と5%水準での有意な負の相関（ $r=-.19$, $p<.05$ ）を、回避性得点は恋人に対する拒否感受性得点と5%水準での有意な正の相関（ $r=.18$, $p<.05$ ）を示していた。

Downey & Feldman（1996）でも、本多・桜井（2000）でも、愛着スタイルと拒否に対する感受性得点の間には、安定性得点（それぞれ、 $-.30$

と $-.32$ ）、アンビバレント得点（同、 $.24$ と $.40$ ）、回避性得点（同、 $.32$ と $.19$ ）、いずれとも有意な相関がみられた。しかし本研究ではアンビバレント得点は拒否に対する感受性の全ての得点と有意な相関が見られたものの、安定性得点は友人に対する拒否感受性得点と、回避性得点は恋人に対する拒否感受性得点とだけしか相関がみられなかった。この違いは、Downey & Feldman（1996）でも、本多・桜井（2000）でも質問内容の対象が「友人」と「恋人」に偏っていたため、友人に対する拒否感受性と安定性得点、恋人に対する拒否感受性と回避性得点の相関が拒否感受性の全体得点との相関に反映されたとも考えられるが、本研究での安定性得点及び回避性得点と拒否感受性得点の相関の弱さから、このことばかりが原因とは思われない。愛着スタイルとの関係については再度検討が必要である。

友人関係スタイルと拒否感受性 現在の友人関係と拒否感受性との関連を検討するために、傷つけ合い回避尺度の4得点（「傷つけられ回避」「距離確保」「礼儀」「傷つけ回避」と拒否感受性得点との相関係数を算出した（Table4下段参照）。その結果、傷つけられ回避得点は拒否感受性のすべての得点と有意な正の相関がみられた（ $r=.18\sim.34$, $p<.05\sim.001$ ）。また、傷つけ回避得点は家族以外の拒否感受性得点（ $r=.18\sim.27$, $p<.001\sim.05$ ）と、距離獲得得点は先生以外の拒否感受性得点（ $r=.18\sim.25$, $p<.05\sim.01$ ）と有意な正の相関を示していた。一方、礼儀得点はどの拒否感受性得点とも有意な相関はみられなかった。これらの結果から、各対象への拒否感受性が高い人ほど友人関係で傷つけたり傷つけられたりすることを回避し、互いのプライバシーにふみこまないようにしていると考えられるが、友人関係において礼儀を守り共感的配慮によって相手を気遣うことと拒否感受性とは必ずしも関連があるとはいえないことがわかった。

恋愛経験と拒否感受性 Table6は恋愛経験（恋人の有無）と対象別拒否感受性得点との関連を示したものである。対象別拒否感受性得点を従属変

Table5 対象別拒否に対する感受性得点と関連尺度得点との相関

尺度・下位尺度	α	拒否感受性得点				
		全体	恋人	友人	家族	先生
拒絶感受性尺度	.91	.460***	.335***	.422***	.321***	.377***
内的作業モデル尺度						
安定性得点	.82	-.140	-.160	-.187*	-.133	-.071
アンビバレント得点	.83	.381***	.342***	.342***	.314***	.250***
回避性得点	.69	.072	.179*	.037	.142	-.034
傷つけ合い回避尺度						
傷つけられ回避得点	.76	.320***	.342***	.341***	.184*	.207*
距離獲得得点	.82	.221*	.248**	.178*	.207*	.102
礼儀得点	.55	-.114	-.147	-.133	-.124	-.078
傷つけ回避得点	.64	.233*	.180*	.273***	.083	.226**

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table6 恋愛経験と対象別拒否感受性得点

恋人の有無	N	恋人拒否感受性		友人拒否感受性		家族拒否感受性		先生拒否感受性	
		平均(SD)	F 値	平均(SD)	F 値	平均(SD)	F 値	平均(SD)	F 値
現在いる	65	9.03 ^a (3.63)		10.81 (3.30)		12.36 (4.38)		16.90 (5.42)	
過去にいた	64	10.93 ^{ab} (3.50)	6.03**	11.57 (3.39)	0.77	13.18 (5.19)	0.70	17.33 (5.62)	0.10
一度もない	20	11.32 ^b (2.38)		11.11 (3.32)		13.71 (5.65)		16.97 (5.27)	

** $p < .01$ (注) 異なるアルファベットの間に5%水準での有意差がある。

Table7 過去のいじめられ経験と対象別拒否感受性得点

いじめられ経験	N	恋人拒否感受性		友人拒否感受性		家族拒否感受性		先生拒否感受性	
		平均(SD)	t 値	平均(SD)	t 値	平均(SD)	t 値	平均(SD)	t 値
有	51	10.62 (3.93)	1.14	12.01 (3.21)	2.06*	12.98 (5.32)	0.16	17.30 (5.37)	0.31
無	98	9.90 (3.35)		10.78 (3.34)		12.84 (4.70)		16.99 (5.53)	

* $p < .05$

数にして恋愛経験を要因にした一元配置分散分析を行った。その結果、恋人に対する拒否感受性でのみ1%水準での有意な主効果が認められた ($F(2,140)=6.03, p < .01$)。Tukeyの多重比較を行ったところ、恋人に対する拒否感受性得点は現在恋人がいる人がもっとも低く、一度もいなかった人がもっとも高いことがわかった。それ以外の対象に対する拒否感受性得点では有意差は認められなかった。この結果から、恋愛経験が恋人に対する拒否感受性に影響していることが分かる。本多・桜井(2000)は恋人のいない対象者の回答は実際の拒否に対する感受性とは異なっている可能性を指摘しているが、本研究の結果はこの指摘を支持するものである。恋人とのこれまでの交際経験が恋人に対する拒否感受性を低減するも

のと思われる。

いじめ経験と拒否感受性

過去のいじめられ経験の有無によって拒否感受性得点が異なるかどうかを検討するために、対応がないt検定を行った(Table7参照)。その結果、友人に対する拒否感受性得点でのみ5%水準での有意差が認められた ($t(137)=2.06, p < .05$)。いじめられ経験がある人は、ない人よりも友人に対する拒否感受性得点が有意に高かったが、その他の対象に対する拒否感受性得点には有意差はみられなかった。さらに、いじめられ経験がある人のデータを用いて、そのいじめられ経験のつらさの程度と対象別拒否感受性との相関を検討した結果、いずれも有意な相関は得られなかった ($r=.09 \sim .22, n.s.$)。

以上の結果から、友人に対する拒否感受性は対象との過去の関係性（いじめられ経験）に影響されるといえるが、その経験のつらさの程度は拒否感受性には関係しない。これは、いじめられたという経験そのものが、拒否に対する感受性を高めるからではないかと考えられる。

総合的考察

本研究では、日本の大学生がどのような場面で拒否される恐れを感じているのかを調査することで、重要な他者（恋人、友人、家族、先生）それぞれとの拒否に対する感受性を独立に測定できる尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とした。

尺度全体としては先行研究と比較しても信頼性の高い尺度が作成できたといえる。しかし、対象別には信頼性が低い尺度もあった。Downey & Feldman (1996) の原尺度は Bandura の期待価値モデルに基づいて考案されており、拒否に対する感受性を拒否に対しておく価値（拒否に対する不安）と期待（拒否の予測）の積によって測定する。このため、ひとつの項目に対してふたつの観点からの評価を求めることになり、回答者の負担も通常の方法よりもかなり大きくなる。尺度の信頼性自体は各対象の項目を増やすことで高めることもできるが、回答者の負担という点からは限界もある。今後は、Downey & Feldman (1996) の測定方法が拒否に対する感受性を評価するのにどの程度有効な方法なのかについて検討するとともに、測定の効率化と項目の多様化についての問題を解決する必要がある。

また、対象間で、拒否感受性の平均値が有意に異なっていた。しかし、このことが各対象に対する拒否感受性の強さを表しているのか、それとも各尺度に含まれている項目内容の違いによるものなのかについては、本研究からはわからない。今後は対象間での項目内容の等質性をどのように保証するかが課題となる。

基準関連妥当性に関しては、浅野（2000）の尺

度といずれの対象への拒否感受性も中程度の有意な相関を示していたことから、ほぼ確認されたといっていいただろう。一方、構成概念妥当性については、愛着スタイル尺度との相関は必ずしも先行研究とは一致していない。先行研究での安定性と回避の相関が特定の対象への拒否に対する感受性が反映されたものかどうかは、本研究だけでは判断できない。今後は、対象別尺度の信頼性を高めた上で、安定性は友人と、回避は恋人への拒否感受性と相関があるという結果の頑健性を確認するとともに、何故、友人と恋人への拒否感受性だけが愛着スタイルと関連するのか検討する必要がある。

また、友人関係スタイル尺度との関連では、各対象への拒否感受性の高い人ほど友人関係で傷つけたり傷つけられたりすることを回避し、距離を確保した友人関係をとっていた。拒否に対する感受性の高い人は他者からの拒否を避けることに最大の価値をおくようになる (Downey & Feldman, 1996) という指摘からも、互いに傷つけたり傷つけられたりすることのないように用心深くつき合い、互いのプライバシーに踏み込まないように表層的で距離を取った友人関係スタイルを取っているものと思われる。

さらに、恋人への拒否感受性は恋愛経験と、友人への拒否感受性はいじめられ経験の有無とのみ関連していた。このことから、過去の対人関係が特異的に現在の対人関係での拒否感受性に影響していることが予想される。今回は、家族、先生との過去の対人関係について問わなかったが、今後は家族、先生との過去もしくは現在の関係性と今回作成した拒否感受性得点との関連を調べることが必要である。

引用文献

- Downey G. & Feldman S. (1996). Implications of rejection sensitivity for intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 1327-1343
- Hazan, C. & Shaver, P. R. (1987). Romantic love concep-

tualized and an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.

- 本多潤子・桜井茂男 (2000). 日本語版拒否に対する感受性測定尺度の作成 筑波大学心理学研究 22, 175-182.
- 浅野良輔 (2010). 両親の養育態度が青年期の恋愛・同性友人関係に及ぼす影響：拒絶感受性による媒介過程の検証 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集 (19), 69.
- 戸田弘二 (1988). 内的作業モデル尺度 吉田富二雄 (編) (2001). 心理測定尺度集Ⅱ—人間と社会のつながりをとらえる (対人関係・価値観) サイエンス社 pp.109-114.
- 岡田努 (2011). 現代青年の友人関係と自尊感情の関連について パーソナリティ研究 20, 11-20.
- 岡田努 (2012). 現代青年の友人関係に関する新たな尺度の作成：傷つけ合うことを回避する傾向を中心として 金沢大学人間科学系研究紀要 4, 19-34.
- 岡田涼・中山留美子 (2009). 対人的拒絶研究の概観：実験社会心理学領域を中心に 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学 55, 27-45.

(戸田 弘二 札幌校教授)
(名知 葵 札幌校卒業生)
(能登 祐加 札幌校卒業生)
(津田 彩子 札幌校卒業生)

付録A 恋人項目に対する想像できないと回答した比率と平均値, SD, 拒絶感受性尺度との相関係数

項目内容	不安評価 (%)	可能性評価 (%)	拒否感受性得点		相関係数
			平均値	SD	
1. あなたが体調不良で寝込んだとき、恋人にお見舞いに来てくれるように頼む。	5.7	11.4	10.06	6.41	.20
2. 恋人に、あなたの買い物につきあってくれるように頼む。	2.9	2.9	7.59	5.44	.19
3. 恋人に、あなたの友達に会ってくれるように頼む。	2.9	2.9	10.85	6.70	.22
4. 恋人に、あなたの親と会ってくれるように頼む。	2.9	8.6	13.47	8.18	.37
5. 恋人に、もっと一緒にいたいと言う。	11.4	11.4	9.77	4.93	-.02
6. 恋人に、会いたいと言う。	2.9	2.9	10.79	7.18	.18
7. 恋人に、メールで今から電話してもいいかとたずねる。	0.0	0.0	7.53	4.65	.16
8. 恋人に、今日泊まりにいてもいいかと聞く。	8.6	11.8	12.07	7.26	.35
9. 恋人に、「好き」などの愛情表現をしてほしいと頼む。	11.4	8.8	15.86	8.32	-.08
10. 恋人に、手を繋いでほしいと言う。	2.9	5.7	7.85	7.30	.34
11. 恋人に、プレゼントをねだる。	8.8	15.2	16.77	8.20	.34
12. 恋人に、誕生日や記念日などは予定を空けて一緒にお祝いをしてほしいと頼む。	5.7	5.9	10.31	8.13	.00
13. 恋人に今日、何をしていたかを聞く。	2.9	0.0	8.76	7.05	.35
14. 恋人に、元恋人との連絡を一切絶ってほしいと頼む。	23.5	26.5	20.67	8.92	.18
15. 恋人に、あなた以外の異性と遊びに行かないでほしいと頼む。	20.6	14.7	22.30	10.17	.36
16. 恋人の携帯の着信が誰からの連絡であるのか聞く。	11.4	8.6	13.33	6.96	.36
17. 恋人に、元恋人との交際について聞く。	5.7	5.7	14.25	8.23	-.02
18. 恋人に、自分と一緒にいる時他のこと（携帯・ゲーム）に夢中にならないでほしいと頼む。	8.6	11.4	15.45	9.74	.04
19. 恋人に、事前にしてきた約束の時間をずらしてほしいと頼む。	0.0	0.0	11.63	7.20	.02
20. デートの予定を、「2人で」ではなく「みんなで」に変更することを提案する。	14.3	11.4	15.90	9.26	.16
21. 恋人に、あまり自分にベタベタしないでほしいと頼む。	14.3	20.0	13.29	7.01	.43
22. 恋人に、もう帰りたいという意思を伝える。	8.8	9.1	9.90	6.95	.47
23. 恋人に、別れてくれるように頼む。	17.1	31.4	15.71	7.68	.37
24. 恋人に、異性の友人と遊びに行ってもいいか聞く。	8.6	11.8	13.17	8.23	.05
25. 恋人と言い争いをした後で、電話やメールで会いたいと言う。	11.4	17.1	14.68	6.77	.47

注) 不安評価及び可能性評価のパーセントは、各評価において「想像できない」と回答した比率

付録B 友人項目に対する想像できないと回答した比率と平均値, SD, 拒絶感受性尺度との相関係数

項目内容	不安評価 (%)	可能性評価 (%)	拒否感受性得点		相関係数
			平均値	SD	
1. 友人に、500円以上のお金を貸してくれるように頼む。	0.0	0.0	8.51	5.88	.20
2. 友人に、授業の出席を代返してくれるように頼む。	0.0	2.4	9.05	5.48	-.15
3. 友人に、あなたが欠席した回の授業のノートを貸してくれるように頼む。	0.0	0.0	4.61	4.35	.20
4. 友人に、あなたのために授業の席をとっておいてくれるように頼む。	0.0	0.0	4.37	3.46	.39
5. 友人、完成したレポートや課題を見せてくれないかと頼む。	0.0	7.1	11.36	6.61	.21
6. 友人の家に泊めてくれないかと頼む。	4.9	7.1	9.32	6.49	.20
7. 友人に、アルバイトを代わってくれないかと頼む。	4.9	9.5	15.87	7.78	.30
8. 友人に、あなたのために買い物をしてきてくれないかと頼む。	2.4	7.1	10.08	6.90	.12
9. 友人に、あなたを車で送ってくれるように頼む。	0.0	0.0	10.76	5.93	.22
10. 友人が食べている物を一口くれないかとたずねる。	0.0	0.0	5.88	4.55	.20
11. 待ち合わせの時間に遅れそうなどとき、友人に待っていてほしいと頼む。	2.4	2.4	6.98	4.74	.14
12. 友人に、約束をキャンセルしたいと告げる。	2.4	4.8	11.44	5.91	.11
13. 友人の携帯電話で電話をかけさせてくれないかと頼む。	0.0	0.0	6.46	4.34	.14
14. 友人に、あなたの買い物につきあってくれるように頼む。	0.0	0.0	8.54	5.53	.18
15. 友人に、メールで今から電話してもいいかとたずねる。	2.4	2.4	6.43	4.38	.24
16. 友人を遊びに誘う。	0.0	0.0	6.37	3.64	.18
17. 友人同士の遊びの約束に、あなたも参加してもいいかどうかをたずねる。	0.0	2.4	11.35	5.32	.28
18. 友人と同じ物を購入してもいいかとたずねる。	7.3	9.5	7.64	4.61	.29

注) 不安評価及び可能性評価のパーセントは、各評価において「想像できない」と回答した比率

付録C 家族項目に対する想像できないと回答した比率と平均値, SD, 拒絶感受性尺度との相関係数

項目内容	不安評価 (%)	可能性評価 (%)	拒絶感受性得点		相関係数
			平均値	SD	
1. 家族に, あなたの送り迎えをしてくれるように頼む。	0.0	0.0	8.69	8.27	.36
2. 家族に, 朝起こしてくれるように頼む。	0.0	0.0	5.17	5.59	.26
3. 家族に, テレビのチャンネルを変えても良いかどうか尋ねる。	0.0	0.0	6.17	7.06	-.09
4. 家族に, 共用のパソコンを使っても良いかどうか尋ねる。	0.0	0.0	4.17	5.14	-.15
5. きょうだいがある家にいる時に, あなたの友人を家に呼んでもいいかと尋ねる。	2.8	2.8	10.43	8.96	.10
6. 家族に, 服を貸してくれるように頼む。	2.8	2.8	5.94	6.70	.12
7. 家族の物をゆずってくれないかと尋ねる。	8.3	8.3	11.21	7.80	.18
8. 親に, 臨時のお小遣いをくれるように頼む。	8.3	8.3	15.00	9.81	.21
9. 親に, 欲しい物を買ってほしいとねだる。	5.7	5.6	15.94	9.55	.27
10. 親に, 生活費をもっと増やしてくれるように頼む。	27.8	25.0	18.62	9.46	.29
11. 親の意に反した進路の希望を伝える。	2.8	5.6	14.88	10.55	.19

注) 不安評価及び可能性評価のパーセントは, 各評価において「想像できない」と回答した比率

付録D 先生項目に対する想像できないと回答した比率と平均値, SD, 拒絶感受性尺度との相関係数

項目内容	不安評価 (%)	可能性評価 (%)	拒絶感受性得点		相関係数
			平均値	SD	
1. 先生に, 書類にサインをしてほしいと頼む。	0.0	0.0	3.93	3.86	.14
2. 先生に, 部活動の顧問をお願いする。	4.9	21.4	14.97	7.27	.05
3. 先生に, 相談にのってほしいと頼む。	0.0	0.0	6.73	4.28	.10
4. 先生を飲み会に誘う。	7.3	9.5	10.78	6.94	.35
5. 授業中, トイレに行ってもいいか先生に聞く。	0.0	0.0	7.05	4.44	.34
6. 先生の話の途中で質問をする。	0.0	4.8	14.28	6.03	-.02
7. 先生に, 授業を時間通りに終わらせてくれるように頼む。	0.0	7.3	13.32	6.23	.30
8. 先生に, ゼミの日程を変更してくれるように頼む。	2.4	9.5	13.49	7.99	.20
9. 先生に, 課題の提出期限を延ばしてくれるように頼む。	0.0	12.2	19.47	8.14	.17
10. 先生に, 欠席した事情を考慮して欲しいと頼む。	2.4	9.5	15.35	7.70	.36
11. 先生に, 授業の単位を出してくれるように頼む。	4.9	16.7	20.54	6.78	.15
12. 先生に, テストの追試験をしてくれるように頼む。	4.9	9.5	17.89	6.17	.32
13. 先生に, 授業でわからなかったことを聞きに行く。	22.0	2.4	5.93	4.59	.18

注) 不安評価及び可能性評価のパーセントは, 各評価において「想像できない」と回答した比率